

正倉院文書写経機関関係文書編年目録―天平勝宝三年―

吉 永 匡 史

一 はじめに

本稿は、本誌第三号（一九九九年三月）より継続している正倉院文書写経機関関係文書編年目録の第十一回目にあたる。今回対象とするのは、天平勝宝三（七五二）年である。本目録作成に至った経緯やその目的などについては、第三号を参照して頂きたい。

二 凡例

・ **文書番号**は、原則として日付順に付した。但し、特に密接な関係を有する文書については隣接させた場合がある。

・ **文書番号**には階層性をもたせている。単体の文書が集合して継文を成す場合、その集合に文書番号を附し、各文書には枝番号を付した。また、各文書が小集合を構成し、いくつかの小集合によって成り

立っている帳簿の場合は、最も大きな集合に文書番号を与え、小集合には枝番号を、各文書にはさらに枝番号を付して、その成立過程を表現しようと試みた。

・ **文書名**の付け方については、その文書の作成目的が明確になるよう心がけた。したがって『大日本古文書』の文書名とは必ずしも同一ではない。往来軸がある場合は基本的にそれに基づき、公式様文書の場合は発信者と書式を明示する文書名を付けた。

・ **年月日の項**には、その文書の作成年月日（帳簿の場合には開始年月日）を示した。（ ）は推定。以下全ての項目において、元号の天平勝宝は「勝宝」と略記した。

・ **期間／作成の項**には、作成年月日が特定できる文書には「作成」を、帳簿など複数の年月日にわたる場合や特定できない場合にはその記載対象の最終年月日を「」に続けて示した。なお、案文などは記載年月日と作成年月日が同一とは限らないが、特に区別はせず、記載年月日をもって作成とした。

・写経事業の項には、当該文書が主として関わる写経事業を記した。
特定の写経事業と関係しない文書については、「二」で示した。

・文書機能の項には、当該文書が果たした機能や内容を摘記した。

・作成／発信↓受信の項には、文書の作成／保管主体、または文書の
発信者／受信者を示した。また、案文の場合には「写書所（↓造東
大寺司）」という形で、推定される正文の受信者を示した。

・大日古の項には、『大日本古文書』編年文書二五巻における所在を
巻数と頁数によつて三495（三巻四九五頁の意）のごとく示した。

・文書の所在の項では、以下の略号を用いた。SⅡ正集、ZⅡ統修、
ZKⅡ統修後集、ZBⅡ統修別集、ZZⅡ続々修、拾遺Ⅱ国立歴史民俗博
物館編『正倉院文書拾遺』。断簡番号は、東京大学史料編纂所編
『正倉院文書目録』既刊部分（正集Ⅰ塵芥、以下編纂所目録と略
す）はそれに従い、必要に応じてマイクロフィルムの紙焼写真に示
された紙数番号を（Ⅰ）で示した。未刊部分は紙数番号のみを記し
た。

・次の項には、当該文書が何次利用かを示した。

・他の利用の項には、同一の紙質上で当該文書以外に文字を書く媒体
として利用されている場合に、それを示した。主に紙背の利用であ
る。利用されていない場合は、空欄とした。

・備考の項には、上記以外の留意点を示し、端裏書や、八世紀当時お
よび近代の編成時における往来軸・付箋の情報は必ず記すこととし
た。また、宮内庁正倉院事務所蔵『正倉院御物目録』『未収古文
書目録』（以下、未修目録と略す）による情報「飯田二〇〇一〜二
〇〇三」を記した。

・宮内庁正倉院事務所編『正倉院古文書影印集成』解説は、集成解説

と略す。

・本目録に含まれない勝宝三年の内容を含む文書、および関係する文
書については、以下の略称を用い、必要に応じて「十588〜592」の形
式で『大日本古文書』編年文書の巻数と頁数を示した（以下、本文
で『大日本古文書』編年文書の巻数・頁数を示す場合にはこの方式
による）。先行目録に収録されている文書の所在等については、先
行目録の当該文書の項を参照されたい。

〔装潢受紙墨軸等帳〕：勝宝二年、装潢受紙墨軸等帳（続々修37

―4、十一156〜170）

〔東大寺写一切経所解案〕A：天平二一年三月頃、東大寺写一切

経所解案（〔新井目録〇一九〕）

〔東大寺写一切経所解案〕B：天平二一年三月二十日以降、東大

寺写一切経所解案（〔新井目録〇二〇〕）

〔東大寺写一切経所解案〕C：天平感宝元年五月三十日以降、東

大寺写一切経所解案（〔新井目録〇三九〕）

〔造東寺司解案〕：勝宝二年、造東寺司解案（統修別集14、三478

Ⅰ483）

〔間写経本納返帳〕：天平十九年、間写経本納返帳（続々修15―

9、九598〜617）

〔間経紙筆墨充帳〕：天平感宝元年六月二十日〜勝宝七年六月、

間経紙筆墨充帳（〔新井目録〇二一〇三〕）

三 写経事業の概観

勝宝三年は、告朔案と食口案から成る「三〇」によって、各月に行

われた写経事業の模様を推測することができる。これを書生（経師）・校生・装潢別にまとめると、表1～3のようになる。以下、これらを適宜参照しつつ概観したい。

1 天平勝宝二年以前からの継続事業

光明皇后発願の五月一日経の書写は、勝宝三年においても引き続き実施された。但しその内実は、天平十五年の方針転換によって、開元釈教録に収載されていない章疏なども書写対象に加えるものであった。方針転換後の写経は、その底本の入手が困難であることを主原因としてなかなか進まず、写経の規模自体はさほど大きいものではない。依然として経疏ともに書写は継続しているものの、底本を容易に入手できるものはこれ以前に書写し終わってしまったため、未写分の目録を作成してその所有者を特定する作業を行い、借り出しが出来次第書写するという状況であった。

勝宝三年における五月一日経の書写については、表1によると経典の書写が行われたのは四ヶ月のみであり、疏の書写が一年を通して継続して進められていた。これは既に述べたように、国内で入手可能な経典の書写はほぼ終了しており、その中心が疏にシフトしていたことによる。しかしこれも「二〇）・「二一」等の奉請文からうかがえるように、精力的に底本の搜索を行うことで維持されていたのであった。また底本の所在を確定するにあたっては、宣教や智憬といった僧侶の協力を得たことが、宣教作成の目録である「五一」や、「五二」に「且勘定交名進上如左、但莫知他人、智憬等之所視也。」とあることからうかがえる。

一方で問写経については、天平二十年に始まった千部法華経が終了

表1 告朔案・食口案にみえる書生・経師数

	写 経 種 類	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
常写	経					34	36				42	16	
	疏	29	55	32	84	314	161	94	64	43	46	66	84
問写	寿量品	151	388	400	32	5	81				題3	題20	
	瑜伽論		13	12	1	1			24	12	23	21	17
	千部法華経	477	795	342	601	188	題3	題11					
	金剛三昧経	5											
	大般若理趣分												
	最勝王経												
	法華玄賛	10						124	5				
	金字華嚴経					152	48						
	六字呪王経				21								
	梵網経疏					16	22		14	13			
	法華経								23	3			

表2 告朔案・食口案にみえる校生数

	写 経 種 類	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
常 写	經						4				3	5	
	疏	5	11	4	16	67	45	20	6	6	10	13	1
間 写	寿量品	40	58	60	10		10				3		
	瑜伽論			2						5	3	6	
	千部法華經	86	127	51	100	34							
	金剛三昧經	5											
	大般若理趣分												
	最勝王經												
	法華玄贊	2						35	1				
	金字華嚴經					48							
	六字呪王經				3								
	梵網經疏									2			
	法華經								5				

表3 告朔案・食口案にみえる裝潢数

	写 経 種 類	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
常 写	經					7					3	2	
	疏	4				10	7	7	6	3		3	10
間 写	寿量品	20	31	21	30	1	3	11		8	65	22	
	瑜伽論				1						8	6	2
	千部法華經	79	125	52	43	24	39	緒11	緒36	13			
	金剛三昧經	4											
	大般若理趣分												
	最勝王經												
	法華玄贊	2				3	2	11	3				
	金字華嚴經			27	4	12	9						
	六字呪王經				3								
	梵網經疏					4		3		4			
	法華經								3	1			

している。五月で一百部の書写が完了し、六・七月にかけて題字が書かれた。布施の申請が六月に行われている〔五五〕。

次に勝宝元年に始められた瑜伽論の書写は、一・六・七月を除いて小規模ながらコンスタントに進められている〔三〇〕。

勝宝二年に開始された寿量品書写については、六月に写経を終え、十・十一月に題字が書かれた。筆墨の請求〔一四〕や、書写状況の報告〔二七〕、料紙の受領報告〔八九〕などから具体的な進行状況を知ることができる。布施の申請が八月に為されており〔六三〕、本年で書写が完了している。

2 勝宝三年開始の写経

表1より勝宝三年に開始された写経事業としては、まず正月に書写された最勝王経・大般若経理趣分・金剛三昧本性清浄不壞不滅経が挙げられる〔三〇〕。宣者などの詳細は不明である。

次に法華玄賛であるが、正月に佐味命婦の宣によって開始され〔七二〕、早速当月より着手されている〔三〇〕。第一巻のみの書写であり、正月で完了したとみられる。その後五月になって善光尼の宣によって一部二十巻の書写が新たに命じられ〔七二〕、七月より開始し翌八月に終了している〔三〇〕。

三月に開始された書写として、金字華嚴経が挙げられる。具体的な経過としては、同月に必要な用度の申請が為され〔一七〕、その後順次紙筆を受領したことがわかる〔一八〕。実際の写経は五月に始められ、経巻の割り当てや〔三八〕、紙筆の充当が行われている〔三九〕。書写は六月にも引き続き行われ〔三〇〕、おそらくこれを以て完了したものと推測される。

四月には、良弁の宣によって六字呪王経の書写が命じられた。書写も同月に為され〔三〇〕〔三二〕、使用した料紙数の報告も確認できる〔三七〕。

五月になると、梵孟経疏の書写が先に述べた法華玄賛と同時に、善光尼の宣によって始められた〔七二〕。途中七月は法華玄賛の書写に着手したためか中断するものの翌月より再開し、九月に完了した〔三〇〕。

また八月には、飯高命婦の宣によって法華経八巻の書写が開始され〔装潢受紙墨軸等帳〕、九月に至り完了した〔三〇〕。

このほか表に掲載されていない間写経としては、正月に佐伯今毛人宣による「奉為嶋御所」の華嚴伝と宣者不詳の弥勒経が写され〔装潢受紙墨軸等帳〕〔二五—〇二〕、十月以降には六十華嚴経が書写されている〔七五〕。

最後に私願経としては、正月に佐伯今毛人の宣によって梵網経・観无量寿経の書写が行われた〔装潢受紙墨軸等帳〕。そして上毛野真人の宣によって二・三・四月に弥勒経・理趣分疏・起信論・起信論疏が書写され〔〇六〕、また良弁の宣によって法華経・无量義経などの写経も行われたようである〔〇六〕〔装潢受紙墨軸等帳〕。四月には東大寺三綱の求めにより、善光尼の忌日のために法華経一部を書写している〔〇六〕。そして五月には葛井根道の私願経である梵網経の写経が行われ〔〇六〕、年月日不明であるが市原王の命による般若呪法などの書写も確認される〔〇六〕。

四 個別文書の検討

〔〇二〕 大般若經の料紙に付されていた文書。勝宝二年より使用のた
びにその数を記し、書写終了後、勝宝三年になって残部枚数を数
えて検定したものとみられる。

〔三〕 勝宝三年における書写料紙の受納・造上数の記録。冒頭部は
大破しており、現状では裏打ちが為されている。そのため、一紙
目と二紙目の間に裏打紙が見え、両紙を分離する形となっているが、
墨痕がまたがるため、両紙は接続する。記載順序については、正
月から十二月までの記載を含むが、日付順ではない。しかし一紙
目と三紙目の奥に約六糎の余白があり、本帳の最終紙である十紙
目も約十四・五糎の余白があることから、奈良時代において最終
的に成巻される前は、少なくとも三つの断簡に分かれて別個に使
用されていたと推測される。

〔四〕 勝宝三年の写書所における経疏出納の記録。勾点や返来的情
報などの書き込みがある。

〔六〕 勝宝三年二月五日より七月二九日までに書写された経疏など
について、その巻数や料紙の供給元、担当経師・装潢などを記録。
なお、続々修11―7は本帳のみで成巻されているが、三紙目の奥
に余白が約九糎あるため、本帳は七月二九日で記載が終わるもの
と考えられる。

〔八―一二〕 いずれも間写経書写の布施申請解であり、作成段階の
異なる案文である。勝宝三年作成とみなされるこの四通について、
密接に関係すると考えられる文書は以下の計八通である。

- ・〔東大寺写一切経所解案〕A (天平二年、十588～592)
- ・〔東大寺写一切経所解案〕B (天平二年、十592～597)
- ・〔東大寺写一切経所解案〕C (天平感宝元年、十609～612)

・〔造東寺司解案〕(勝宝二年、三478～483)

・〔〇八〕 造東寺司解案 (勝宝三年、十602～604)

・〔〇九〕 造東寺司解案 (勝宝三年、十597～601)

・〔一〇〕 造東寺司解案 (勝宝三年、十一477～482)

・〔一一〕 造東寺司解案 (勝宝三年、十604～609)

これらの作成順序を整理すると、基本的に右に掲げた通りであ
ると考えられる(〔東大寺写一切経所解案〕A～Cの順序は、〔新
井目録〕に従う)。はじめに、四段階目である〔造東寺司解案〕
より個別に基礎的な検討を加えておきたい。

〔造東寺司解案〕：事実書の第三紙一行目を『大日本古文書』
で「全年」とするのは、「今年」の誤りである。記載中最新の年
紀は勝宝二年であり、また「今年」を勝宝二年に訂正しているこ
とから、本文書が最初に作成されたのは勝宝二年とみられる。

〔東大寺写一切経所解案〕Cと比較すると、新家弟山宣による薬
師経を削除し、佐伯今毛人宣による薬師経七卷、および山口人麻
呂宣による十一面経十一巻が追加されている。なお、集成解説に
よれば、第一紙二行目にみえる総巻数は淡墨書・墨書による複数
次の訂正を経ており、両者の重なり方から、淡墨書による訂正が
先行すると考えられる。すなわち、「合奉写間経玖伯壹拾陸卷」
は、「間」・「陸」字を淡墨により抹消し、「陸」の右に「漆」を傍
書。そして次段階の修正として、「壹」の右傍に「伍卷」を墨書
するとともに「漆」(淡墨)を抹消している。つまり総巻数は、
次の様に変化している。

訂正

① (淡墨)

② (墨)

総巻数

九一六卷

↓↓ 九一七卷

↓↓ 九〇五卷

α段階

β段階

γ段階

α段階において計算上正しいのは九一七巻であり、①の訂正は本文書作成後間もなく為されたものと推測される。②については、第三紙一行目の「今年十二月十五日」に為された「去天平勝宝二年十二月卅日」という訂正も墨書で為されていることを勘案すると、これと②の訂正は同時期であり、勝宝二年を「去」と呼べる時期、すなわち勝宝三年以降であると推測される。本文書は勝宝二年に最初に作成された後も、各段階で別個案文を作成しながらも手を加えられていることから、布施申請解を作成する上での基本となる手控えであったと考えられる。

〔〇八〕…総巻数は九一七巻。記載が途中で終わっている。奥に大きく余白があるため、何らかの理由によって途中で記すのを止めたと考えられる。第九紙二行目に「玖伯壹拾漆巻」とあり、経師の数も「貳拾人」であることから、「造東寺司解案」β段階（以下、「解案β」と略称。他も同じ）を見て書写したとみられる。よって、この段階ではまだ「造東寺司解案」に「伍巻」という②の訂正は為されていないものと推測される。

〔〇九〕…総巻数は九〇五巻。布施の総計部分は、「解案γ」を反映しており、②の訂正が為された後に作成されたことがわかる。〔〇八〕を第二次利用して作成されている。

〔二〇〕…総巻数は九〇五巻。〔〇九〕の誤りである「道守豊足冊」（第八紙十二行目）を「道守豊足」に訂正している。〔〇九〕より後次に作成されたとみられる。未写経律論集目録の首部として第二次利用されていることから、写書所において布施申請解として保存されたわけではない点に留意したい「太平a一九九五」。

〔一一〕…総巻数は九〇五巻。仏説灌頂梵天神策経の巻数がみえないが、〔〇九〕などから三巻であるとすれば、九〇五巻で計算が合致する。第一二紙五行目の布施布の総量記載「壹丈参尺」は抹消されているが、おそらく正文で反映されたものと推測される。種々の勾点などから、本文書は布施支給台帳として使用されている。

以上を踏まえ、まず確実視される作成順序をみていきたい。〔解案β〕と〔〇八〕は、総巻数などの記載が合致することから、〔解案β〕↓〔〇八〕の順序を想定可能である。但し、〔解案β〕で為された布施布総量部分の訂正「応給布施布」を「請布施布」に修正を〔〇八〕が反映していることから、逆は考えにくい。次に、先に指摘したごとく〔〇九〕にみえる道守豊足の誤植を〔二〇〕で訂正していることから、〔〇九〕↓〔二〇〕の順も確認される。そして〔一一〕は布施支給台帳となっていることから、その正文は決済を経たものでなければならず、最終的な案文であると考えられる。よって一連の文書の最後に位置付けねばならない。

右のように確実な順序を押さえたところで、各文書間の前後関係限定していききたい。まず、天平二十年の良弁宣による理趣経の有無に着目すると、本経がみえるのは「造東寺司解案」と〔〇八〕のみであり、総巻数を考慮すると、これらは〔〇九〕・〔二〇〕・〔一一〕より前の作成とみられる。そして②の訂正で理趣経と十一面経（山口人麻呂宣）に付された勾点が削除を示すものだとすると、これら二経を含む〔〇八〕は、記載がみえない〔〇九〕・〔二〇〕・〔一一〕より前に作成されたことになろう。

次に、「造東寺司解案」の使用状況についてであるが、先に述べたように①（淡墨）の訂正は、α段階が記されて間もなく為されたと考えておく（〇八）作成の前）。問題となるのは、②の訂正が何時為されたのかということ、すなわち「解案Ⅱ」と（〇九）・（一一〇）・（一一一）の前後関係である。

四通の各総計は一致するが、経師・題師・校生を個別にみると、（〇九）・（一一〇）・（一一一）は対応するものの、「解案Ⅱ」は大きく異なる。よって「解案Ⅱ」を他三通の後次とするのは考え難い。同様の理由から、「〇九」（一一〇）↓「解案Ⅱ」も困難である。よって、②の訂正が為された後、「〇九」・（一一〇）・（一一一）が作成されたと考えられよう（②の訂正で理趣経・十一面経に削除の勾点を付してから、「〇九」を作成）。

以上から、「造東寺司解案」より（一一一）までの作成順序は次のように想定されよう。

〔解案α〕↓〔解案β〕↓〔〇八〕↓

↓〔解案Ⅱ〕↓〔〇九〕↓〔一一〇〕↓〔一一一〕

最後に考えておきたいのは、（一一一）の「二月七日」という日付である。既に大平聡氏が疑念を呈しているように、なぜ日付が（〇九）・（一一〇）より前になっているのだろうか。これについては明確な理由を示し得ないが、恐らく当初の予定では二月八日に申請することになっており、そのつもりで事前に作成を進めていたが、何らかの事情で早まったものと推測される。つまり、（〇八）↓（一一一）の四通は、一応日付が記されているものの、これは実際に作成した日付ではなく、いずれも七日以前に作成されていた文書と考えられる。布施の対象となった間写経の書写は、い

ずれも天平二十年（勝宝二年）に行われたものであり、勝宝三年に至るまで布施は支給されないままであった。期限（申請日）を予め設定した上で文書の作成を進めていたことが、複雑な作成段階を生み出す原因になったと推測される。

〔一六〕 寿量品書写における端切・装潢作業の記録（三月四日から十一月三日まで）。往来軸には「寿量充端切帳」とある（表裏同文）。本文書は二紙より成るが、二紙目は余白が約一二厘あることから十一月三日をもって記録を終えたとみてよい。各紙の裏書は論の名称であるが、いずれも紙の左端に記されている。よって經典の包紙を第二次利用して本帳を作成したとみられる。

〔一九〕 法華経十一部、無量義経二二巻の奉請文。続々修16—9は二紙のみで成巻され、本文書は一紙目である。現状は、左端中央部に穴を開け、二紙目とともにこよりでくくっている。

〔二〇〕 造東大寺司より大安寺法宣大徳房宛の奉請文。折り目があり、集成解説は折界とする。

〔二三〕 造東大寺司より元興寺暁仁大徳房宛の奉請文。造東大寺司官人（市原王・上毛野真人・紀池主）の自署があるが、文書に折りたたみ痕がある点が重要である。本文書は写書所に残されたもので案文ではあるが、正文と一緒に宛先へ送られた可能性がある。すなわち、正文は宛先に残ったが、案文は造東大寺司（もしくは写書所）に使者と共に戻ったものと推測できる。

〔二四〕 本文書は、写書所で作成した〔二三〕の案文と考えられる。

〔二七〕 寿量品書写の途中報告。年月日がみえないが、「見奉写三千七百一十五巻」とあることより、〔三〇〕をもとに作成時期が特定可能である。寿量品の書写は六月に完了していることから、逆算

すると三月中に作成されたことがわかる。

〔二八〕勝宝三年正月の告朔案。冒頭部分が「写書所解 申正月行事」となっていること以外は、解案の九行目まで〔二九〕と同文である。しかし、記載部分左に約十二糧の余白があり途中で記すのをやめていることや、記載部分上部に抹消を意味する横線が引かれていることから、〔二九〕より前段階の草案とみられる。

〔二九〕勝宝三年正月の告朔案。後欠。記載されている写書巻数や用紙・経師などの内訳は、基本的に〔三〇—一一〕に一致する。四紙目の左端に「志紀昨万呂」の残画がある（『大日本古文書』では未収）。

〔三〇〕勝宝三年における書写事業の食料支給、および正月～五月までの事業内容にかかわる記録。各断簡の配列については、西洋子氏の復原に従った「西 a 一九九六」。「一〇一」は、「写書所解 申十二月告朔事」とあるが、記載されているのは食口数のみである。よって文書の機能としては、告朔案ではなく食口案となる。「一〇二」は、既に作成されていた〔二九〕の紙背を利用して、まず十月三十日までの食口案が書され、訂正を経て正文を別に作成、次いで翌月の食口案を余白に追込み形式で記したものと推測される（これも同様に、訂正を経て正文を別個作成か。「一〇二—二」には「起十月一日」とあるが、「十一月一日」の誤りであろう）。西氏が指摘するように、この部分だけをみれば帳簿の右を一月にして貼り継がれたとも想定可能である。しかし、本文書が既に三紙を貼り継いだ状態の反故を第二次利用したものであることや、本帳簿の紙背の多くが空であることを考慮すると、十月・十一月の順に右から左へ書かれている現状は、本案作成段階

における反故の利用状況に規制されたものであり、本帳簿内での特殊なあり方とみてよいだろう。「一〇九・一〇・一一」はいずれも日付が四月五日であり、自署するのは鴨書手・他田水主・呉原生人の三名である。よってこれらは四月になってまとめて作成されたものであろう。但し、日付は同日であるものの、〔二九〕をもとに訂正を加えて作成したのが「一一」と考えられ、また「一一」のみ継目裏に「書」字が記されていることから、各文書の実際の作成段階が相違していたことを推測せしめる。

〔三一〕寿量品書写の校帳。右に往来軸「品校帳三巻複」（「三巻複」は右寄せ小字）が貼り継がれている。四月十日から七月六日までの記録であるが、これは〔三〇〕からうかがえる寿量品書写の経過と合致する。七月六日に下道主が装潢に送っていないことを記して検じているが、余白が約十二糧あることから、これを以て本帳は役割を終えたものと推測される。

〔三三～三五〕読経すべき大・小乗経律の巻数の検定記録。他所に求めるべき經典や、未写経分も注記する。『大日本古文書』では勝宝三年に類収。いずれも四月二四日とあり、総巻数部分が一致することからも、同一案件についての一連の文書とみられる。今回勝宝三年と判断したのは、〔三五〕に「四月廿四日奉請宝星陀羅尼經十卷」とあり、この宝星陀羅尼經十巻が〔四七〕に確認できることによる。〔四七〕によれば、これは「奉出經」の一つとして記載されており、検定が行われた六月八日の時点ではまだ返却されていなかったようである（後の異筆による注記「但在帙」あり）。三通の作成順序としては、〔三三〕における大・小乗経律それぞれの巻数の訂正（例えば大乘経律では「見写五十七巻」を五

十六卷に修正」が〔三四〕・〔三五〕で反映されていることから、〔三三〕を第一とみなした（なお、〔三五〕の巻数を『大日本古文書』が「五十七巻律」とし七を六に傍訂して表記するのは誤りで、紙焼写真によれば明らかに「五十六巻律」とある）。次に〔三四〕と〔三五〕であるが、〔三四〕の「但、依求来数可加耳。」という指示が〔三五〕で巻数の増加という点で確認され、また〔三五〕には五月三日までの追記が為されていることから、〔三四〕↓〔三五〕という順序を想定してよからう。

〔三七〕 六字呪王經書写に使用した料紙数の報告。年紀がみえないが、〔三〇〕によれば四月に六字呪王經の写經を行っており、「良弁大徳天平勝宝三年四月四日宣」という記載からも、本文書は勝宝三年の四月頃に作成されたとみてよい。前欠であるもの、おそらく写書所解案とみられ、文末に解の文言をもたないことからすると、初期段階の草稿か、完成した解案からの抜き書きと考えられる。付箋には「卅一ノ九」とあるが、未修目録には「依良弁大徳天平勝宝三年四月四「日」宣「定」云々 一枚」とみえるため、続々修編成以前に前部は剥離していたらしい。

〔四二〕 岡寺から借用していた雑阿含經等を、大徳（良弁）宣により、造東大寺司が紫微中台へ進上した奉請文。奥に紫微中台における受領記録があり、さらに少疏高丘比良麻呂による造東大寺司への返納の追筆がある。よって本文書は雑阿含經に付された正文であると考えられる。

〔四二〕 東大寺華嚴宗の僧に対する、講読の布施にかかわる文書。華嚴宗よりもたらされた案文に、写書所で納櫃構成などの書き込みが為されている。追筆は朱墨と墨書で行われており、重層的な作

成段階が想定される。二箇所同一の付箋「卅九ノ十五」があり、未修目録には「華嚴宗布施法文案 同 六枚」とある。五紙目より記載方式が変わるが、現状も六紙が貼り継がれており、奈良時代以来の貼り継ぎである可能性がある。

〔四三〕 新華嚴經第十四卷および疏二卷（第三卷、第五卷末）の返送文。年紀を欠くが、「問写經本納返帳」によれば、勝宝三年五月二五日に疏の第三巻を借用し、六月七日に返送したことがわかり、勝宝三年の文書と推測される。

〔四四〕 新華嚴經疏二卷（第二卷本末）の返送文。年紀を欠くが、〔四三〕と同様に、「問写經本納返帳」によって勝宝三年の文書と推測される。

〔四五〕 〔四六〕 〔四五〕は、板野命婦宣による薬師經百卷進上の命令。年紀を欠くが、この命令を受けて作成された写書所の奉請文である〔四六〕より、勝宝三年であることがわかる。〔四六〕によれば、このとき請求された薬師經百卷は台舍人沼江道足・敦賀石川等に付されている。よって造東大寺司次官佐伯今毛人が板野命婦の宣を直に奉り、急を要するため造東大寺司政所を経ずに今毛人から直接写書所に通達されたと考えられる。同日に台舍人に經典を付していることから、おそらく沼江道足等が〔四五〕をもたらしたとみてよいだろう。なお、未修目録には「薬師經百卷 六月八日 二枚」とある。〔四五〕は一枚で構成されるが、現状で左に直接貼り継がれている〔四六〕も一枚であり、合計すると未修目録の枚数と合致する。よって、この貼り継ぎは続々修編成以前に既に成立しており、奈良時代以来の貼り継ぎである可能性がある。

〔四七〕第四・五・六御櫃内の經典の出納帳。現状で①・②・③はそれぞれ新補白紙を挟んで貼り継がれており、接続するものではない。しかし、櫃ごとに記載する方式が共通しているため、『大日本古文書』に従い、一連の帳簿として取り扱った。

〔四八〕標瓊の口状に基づく、大小乗目録二巻の新薬師寺宛返送文。貸出中であつたこの目録が写書所に返却され次第、新薬師寺へ返送することとなっていたらしい。年紀を欠くが、〔〇四〕によれば二月八日頃に紫微中台へ貸し出していたことが知られ、異筆で「返来了」とあることから、これをもって本文書が作成されたとみてよい。よって勝宝三年の文書と判断できる。

〔四九〕「令旨」に基づく、東大寺宣教大徳房宛の奉請文。無量義経疏をはじめとした疏等五部を請求する。「令旨」の詳細は不明。

〔五〇〕先の〔四九〕と同様に「令旨」に基づく、大安寺法宣大徳房宛の奉請文。起信論疏の貸出を請求。

〔五二〕〔五三〕〔五四〕三通ともに、借用すべき経疏・章などを記録する。これらも〔四九〕・〔五〇〕と同じく、「令旨」によって作成されたと考えられ、〔四九〕・〔五〇〕で奉請した疏や論が確認できる。〔五二〕は続々修12―9の八・九紙目にあたるが、十紙目について『大日本古文書』は本文書と一続きのものとして取り扱っている。しかし、新補白紙を狭むうえ記載方式・内容ともに一致せず、別文書とすべきであろう。〔五二〕には多くの勾点が付されているが、一つの経疏に対し所在を複数記しているため、三通の中では最も情報量が多い。これに比して〔五三〕の段階では経疏別に奉請先が絞り込まれており、〔五二〕で付された勾点が取捨選択を示すものであることがわかる。そして〔五四〕では

経疏別ではなく所有者別に再整理されており、三通の中では最も整った体裁をもつ。よって、〔五二〕↓〔五三〕↓〔五四〕の順序で作成されたと考えられる。

〔五五〕天平二十年より始まった千部法華経のうち、一百部の書写に対する布施申請解。本文書は案文であるが、勾点などがみられ、支給台帳としての役割を果たしたと考えられる。

〔五六〕小僧都（良弁）の宣による、弥勒經一部三巻の奉請文。田部乙成に付して良弁のもとへ貸し出した旨がみえ、異筆で「返来了」とみえる。本文書は〔六一〕の余白に追いつきで記されているが、〔六一〕は龍蓋寺からの雑阿含経の返抄であり、〔五六〕とは直接の関係をもたない。ここで〔六一〕の日付が八月一日であり〔五六〕より後である点が問題となるが、両者ともに使が田部乙成（六一）では「舍人田部弟成」であつたという共通点に留意したい。〔六一〕は正文であるが、何らかの理由で田部乙成がかかわった案件を整理する必要があるが、余白にまとめて記されたと考えられる。「返来了」という異筆追記も、この案件が無事完了したことを確認するものであろう。

〔五八〕市原王による、高僧伝の貸出請求。本文書は年紀・月を欠き、「廿一日」としかみえない。しかし〔〇四〕によれば、市原王は七月一日に高僧伝の第六巻を、二一日に一帙（十巻）を借り出している。よって〔〇四〕にみえる「玄蕃宮七月廿一日宣」はまさしく本文書を指し、勝宝三年七月二日に作成されたと判断できよう。

〔五九〕写書所に保管されている各櫃内に納められていた經典の記録。確認できる唯一の日付は、内裏に經典を貸し出した記録にみえる

「依 今月廿五日宣奉請」である。しかし、四櫃から出された

旧・新華嚴經の巻数、および五櫃の最勝王經等の巻数が〔四七〕のそれと一致するため、勝宝三年の文書とみてよい。内裏への奉請記録の次に「可問失經」とあり各櫃の記載が始まっていることから、文書後半部は、内裏への貸出を機会に記されたものと考えられる。一・二・六・八・九櫃には「无事」とあり、出納が為されていない様子がうかがえ、本文書は勝宝三年のある段階における各櫃内の状況を記録したものとみられる。そこで注目したいのは、〔四七〕の四櫃記載部分に異筆で「返納了」の追記がみえる一方、本文書にはみえない点である。よって本文書の作成段階では四・五櫃の各経は貸し出されたままの状態と判断される。〔四七〕によれば本文書に対応する四・五櫃の検定は七月二七日に為されていることから、先の日付の「今月」は七月であり、〔四七〕にみえる七月二七日付の検定の作業記録が本文書である可能性があろう。いずれにせよ本文書は、内裏へ貸し出す經典を櫃から取り出すにあたって、あわせて各櫃の内部状況を記録した作業メモであり、この情報が出納の履歴を記した台帳である〔四七〕に反映されたのではないだろうか。

〔六〇〕 造東大寺司が龍蓋寺に宛てた、雑阿含經一部の返却通知。『大日本古文書』では区別しないが、「使田部乙成」は異筆とみられる。

〔六一〕 龍蓋寺より造東大寺司に貸し出していた經典の返抄。經典の名称が記されていないが、〔六〇〕より雑阿含經であることがわかる。〔六〇〕と同日であり、造東大寺司からの返却をうけてすぐに発給されたとみられる。余白に記された〔五六〕との関係に

ついては、同項を参照。

〔六五〕 東大寺俱舎衆からの、俱舎論等の貸出請求。文書奥に、造東大寺司次官・判官による貸出業務遂行を命ずる司判が加えられている。また、本文書とは別件として、内裏への一切経目録進上についての追記がある。

〔六六〕 僧嚴智による、無量經・能断波若經の貸出請求。文書奥に造東大寺司判官上毛野真人によつて貸出業務遂行を命ずる司判が加えられている。司判が為された後、造東大寺司から写書所にもたらされたと考えられる。

〔六八〕 尼宝淨による、華嚴經疏八十卷の貸出請求。文書奥に判官上毛野真人による司判が加えられている。司判が為された後、造東大寺司から写書所にもたらされたと考えられる。

〔六九〕 東大寺による、維摩經疏の貸出請求。判官上毛野真人の署判があることから、まず造東大寺司にもたらされた後、署判が加えられて写書所に届けられたのであろう。

〔七〇〕 東大寺による、成実論・章疏の貸出請求。奥の余白に造東大寺司政所で司判を書き加え、写書所に通達したものと考えられる。

〔七一〕 解文の体裁をとる、大乘經典の目録。講読の布施にかかわる文書である。案文に、雑秩構成や布施額などの書き込みが朱墨や墨書で為されている。

〔七二〕 年次未詳であるが、〔三〇〕によれば、法華玄贊の書写は正・七・八月に、梵網經疏は五・六・八・九月に行われている。また〔間經紙筆墨充帳〕の勝宝三年の記載によれば、法華玄贊の充紙筆は正・二・五・七月、梵網經疏は五・六月に実施されていることがうかがえる。よって本文書は勝宝三年九月以降に作成された

と考えられる。作成が次年度以降に持ち越された可能性も否定できないが、ひとまず当年中とみなしておく。

〔七三〕 東大寺による、温室経等の貸出請求。造東大寺司政所に宛てられたものであり、文書奥に判官石川豊麻呂による司判が加えられている。司判が為された後、造東大寺司から写書所にもたらされたと考えられる。

〔七四〕 左大臣家による、南海伝第一巻の貸出請求。宛所は東大寺三綱所であるが、三綱所から造東大寺司政所にもたらされ、奥の余白に司判を加えた後、写書所に通達したものと考えられる。

〔七五〕 勝宝三年十月十四日より勝宝五年十月一日までの料紙納充の記録。本帳の始まりである続々修28―13五紙目の一行目に「三年十月十四日胡桃紙一千二百張 充能登忍人」とみえるが、これは「裝潢受紙墨軸等帳」より、六十華嚴経一部の書写に用いられたことがわかる。

〔七六〕 〔七七〕 いずれも造紙作業についての春日虫麻呂の作業報告。但し、双方ともに虫麻呂の自署はなく二通の解を一括して記していることや、〔七六〕では脱字を補っていることなどから、案主が照合用に作成した手実の写しであると考えられる。両文書は同日に作成されているが、別作業の報告である。現状で両者は接続しておらず、新補白紙を挟んで貼り継がれている。〔七六〕は付箋「卅二ノ十三」があり、未修目録「春日虫麻呂解 造間疏用紙事 天平勝宝三年十月廿二日 一枚」に対応する。

〔七八〕 金字最勝王経を阿弥陀堂より借り出したことの報告。庫外流出文書であり、『大日本古文書』によれば蜂須賀家所蔵とある。現在は所蔵者不明であり、拾遺でも写真版は掲載せず所在不明文

書として取り扱っている。ただ文書の写真については、次の二つの方法によって確認可能である。まず、大正五年に撮影された東京大学史料編纂所所蔵台紙付写真（請求記号156―4005）が挙げられる。台紙には「天平勝宝三年十月金字最勝王経奉請注文 侯爵蜂須賀茂韶氏所蔵」とあり、原寸大で撮影されている。不明瞭ながら裏打ちが為されている様子がうかがえ、右には剥がし取り跡が確認され、右上は欠けている。また、左には判読不能な墨痕がある。そしていま一つは、昭和四三年六月に東京古典会が主催した古典籍展観大入礼会の『展観入札目録』である。「第三 古文書類」に「鴨書手・呉原生人解」として掲載されており、写真版が別個収録されている。写真版によると軸装されていることがわかり、先の台紙付写真の裏打ちは、あるいは既に軸装されていたことを示すのかもしれない。

〔七九〕 寿量品に用いる緒軸、および金字華嚴経に使用する緒の請求。前者は十月十八日付の写書所解案、後者は翌日の日付をもつ申送文案である。但し末尾に「以前、並判次官并上毛野判官」とあることから、ある段階で正文をまとめて抄録したものと推測される。年紀がみえないが、十月の食口案（二三〇―〇二―一）によればこの月に寿量品の題字を行っており、勝宝三年の文書とみてよい。金字華嚴経については同月の食口案にみえないが、同一紙に連続して記されていることや、五・六月の告朔案（二三〇―〇六・〇七）に写経の実施を確認できるので、同様に勝宝三年とみてよいだろう。

〔八二〕 勝宝三年十一月十一日牒に基づく、疏論等の奉請文。牒の内容や、本文書の宛先は不明である。〔八〇〕は本文書の草案とみ

られる。現状で一紙より成る本文書には付箋がみえないものの、未修目録「写経目録 造東大寺司「合奉請論并章疏云々」天平勝宝三年十一月十一日 一枚」に対応すると考えられる。

〔八二〕左大臣家による、南海伝一部（計四巻）の貸出請求。宛所は造東大寺司政所である。奥の余白に政所で司判を加え、写書所に通達したものと考えられる。

〔八三〕東大寺律宗による、舍利佛間経等の貸出請求。宛所は造東大寺司政所である。奥の余白に政所で司判を加え、写書所に通達したものと考えられる。

〔八四〕東大寺俱舎衆による、集異門足論等の貸出請求。宛所は造東大寺司政所である。奥の余白に政所で司判を加え、写書所に通達したものと考えられる。

〔八五〕勝宝三年において竹野廣成が行った、写経・校正の作業報告。但し廣成の署名はなく、日付の後に校書の記載が加えられているなどの点から、案主が照合用に作成した手実の写しであると考えられる。各経巻名の上に「合」字や圈点（点）が記されており、案主がチェックを行った様子がうかがえる。『大日本古文書』では「合一百九十四張」を文書末行としているが、余白約一・二厘のちに墨痕（判読不能）がみえ、おそらく後欠であると推測される。

〔八七〕天平勝宝三年十二月における布施の記録。「自充本帳検出者」とあり、写書所に置かれていた基本帳簿からの抜き書きである。本文書の最終紙である一紙目に余白が約五厘あるため、記録は完結せずに途中で終わっている可能性がある。

〔八八〕天平勝宝三年十二月における布施の記録。経師一人ごとに、担当した経巻を列挙して布施額を記す方式は、〔八七〕に同じ。

『大日本古文書』は〔八七〕に連続するとみるが、前項で述べたように〔八七〕は途中で記録が終わっている可能性があるため、断定できない。なお、現状で三紙より成る本文書に付箋はないものの、未修目録「校生等布施帳 天平勝宝三年十二月十五日 三枚」に対応するとみられ、三紙は奈良時代以来の貼り継ぎである可能性がある。

〔八九〕寿量品書写に必要な料紙の受納、および不要分の返上の記録。現状で一紙より成る本文書に付箋はないものの、未修目録「請寿量品料紙事 天平勝宝三年十二月廿四日 一枚」に対応すると考えられる。

〔九〇〕興福寺による、出家功德経の貸出請求。貸出完了および返却確認の文言が奥の余白にそれぞれ追記されている。

〔参考文献〕

- 新井重行「正倉院文書写経機関係文書編年目録―天平勝宝元年―」
（『東京大学日本史学研究室紀要』七、二〇〇三）
飯田剛彦「正倉院事務所所蔵『正倉院御物目録十二（未修古文書目録）』」（『正倉院紀要』二三～二五、二〇〇一～二〇〇三）
石上英一「正倉院文書目録編纂の成果と古代文書論再検討の視角」
（石上ほか編『古代文書論』東京大学出版会、一九九九）
大平聡 a 「正倉院文書と古写経の研究による奈良時代政治史の検討」
（『科学研究費報告書』一九九五）
大平聡 b 「写経事業と帳簿」（前掲『古代文書論』）
黒田洋子「布施勘定帳」の基礎的分析」（『正倉院文書研究』六、吉川弘文館、一九九九）

榮原永遠男「千部法華經の写経事業（上）」（『正倉院文書研究』一〇、吉川弘文館、二〇〇五）

藺田香融「南都仏教における救済の論理（序説）」（『日本宗教史研究

四 救済とその論理』法蔵館、一九七四）

西洋子 a 「食口案の復原（1）」（『正倉院文書研究』四、吉川弘文館、一九九六）

西洋子 b 「正倉院文書整理過程の研究」（吉川弘文館、二〇〇二）

野尻忠「正倉院文書写経機関関係文書編年目録―天平二十年―」（『東

京大学日本史学研究室紀要』六、二〇〇二）

早川庄八『宣旨試論』（岩波書店、一九九〇）

福山敏男『奈良朝寺院の研究』（高桐書院、一九四八）

皆川完一「光明皇后願経五月一日経の書写について」（坂本太郎博士

還暦記念会編『日本古代史論集 上巻』（吉川弘文館、一九六二）

山口英男「正倉院文書の継文について」（前掲『古代文書論』）

山下有美『正倉院文書と写経所の研究』（吉川弘文館、一九九九）

〔付記〕本目録は、かつて丸山裕美子氏が石上英一先生のゼミで報告したものをもととし、吉永による再報告を経た上で作成したものである。したがって丸山氏の知見を参考にしつつも、文責は吉永にあることを明記しておく。

作成／発信→受信	大 日 古	文書の所在	次	他の利用	備 考
写書所	十一463	ZZ44-8〈1〉	1		軸付。付箋「冊二・十五」、未修目録1053「一枚」。
写書所	十一463～464	ZZ4-20〈13〉	1		付箋「十」「冊五ノ六」。未修目録1163「一枚」。
写書所	十一464～471	ZZ28-15〈1～10〉	1		前欠。付箋(1)「三十六ノ十八」、未修目録947「十五枚」。
写書所	三542～558	ZK38(2～6)、ZK42 ④	2	一次、〈3・4〉写書所解案(勝宝2、三423～425)、〈5〉某状札紙(未収)	
写書所	三537～539	S8②裏	2	一次、天平21年具注曆(三347～353)	抹消あり。往来軸「納雑物帳/勝宝三年」(中倉22ノ残欠5号)。
写書所	十一471～475	ZZ11-7〈1～3〉	1		往来軸「写私雑書帳」(右軸、表裏同文)。
深道→写書所	三487	ZZ15-10〈2〉	1		
写書所(造東大寺司→太政官カ)	十602～604	ZZ41-5〈8・9〉裏	1	二次、〔09〕	
写書所(造東大寺司→太政官カ)	十597～601	ZZ41-5〈7～9〉	2	一次、〔08〕	付箋(7)「廿一ノ三八」、未修目録404「三枚」。
写書所(造東大寺司→太政官カ)	十一477～482	ZZ13-4〈1～3〉裏	1	二次、未写経律論集目録(勝宝5、十二549～555)	
写書所(造東大寺司→太政官カ)	十604～609	ZZ41-5〈10～14〉	2	一次、〈10・11〉写書所牒案(勝宝2、十一429～430)、〈12～14〉東大寺写一切経所解案(感宝元、十609～612)	付箋(10)「三」「出八巻」、〈11)「勝宝三年二月八日文書/用紙千七百拾五張と継カ」、〈12)「出ノ十」。
写書所	三487～489	ZZ46-6〈1・2〉	2	一次、〈1〉造東寺司解案(天平20、十442～443)、〈2〉習書	1行目未収。
元興寺三綱→写書所	十一482	ZZ16-3〈14〉	1		
写書所(→造東大寺司)	十一484～485	ZZ9-12〈1〉	1		往来軸「請寿量品/墨筆帳」(右軸、表裏同文。但し軸銘の上に「不用」と大書)。
写書所(→造東大寺司)	各文書参照	各文書参照	—	各文書参照	
写書所(→造東大寺司)	十一489～492	ZZ38-1〈1〉	2	一次、佐保宅写経并薬師經充紙注文(勝宝2、二十五9～11)	付箋「廿三帙三巻一」、未修目録444「二十一枚」。
写書所(→造東大寺司)	十一492	ZZ38-1〈2〉	2	一次、佐保宅写経并薬師經充紙注文(勝宝2、二十五9～11)、写書所解案(勝宝2、二十五22)	付箋「廿四帙六巻」、未修目録452「廿三巻」。
写書所	十一492～496	ZZ9-13〈1・2〉	1	裏書(1)「解説道論十二巻」、〈2)「小乗論雜第一帙/識/阿毘達磨身足論九巻(界足三巻/身足論六巻)」	往来軸「寿量充端切/帳」(表裏同文)。

文書番号	文 書 名	年 月 日	期間／作成	写経事業	文書機能
01	充経師等畳帳	勝宝3.1.8	～勝宝3.2.18	写経一般	畳席の支給記録
02	大般若経料紙検定文	勝宝2.1.23	～勝宝3.1.19	間写	料紙の使用・残部数の記録
03	装演請紙并造上所闕帳	勝宝3.1.23	～勝宝3.12.29	写経一般	料紙の受納・造上の記録
04	経疏出納帳	勝宝3.1.25	～勝宝4.4.3	五月一日経・間写	経・疏等の出納記録
05	納雑物帳	勝宝3.1	～勝宝3.6.4	写経一般	雑物の受納記録
06	写私雑書帳	勝宝3.2.5	～勝宝3.7.29	私願経	書写巻数・用紙等の記録
07	僧深道返抄	勝宝3.2.5	作成	間写	華嚴伝受領の返抄
08	造東寺司解案	(勝宝3.2.7以前)	作成	間写	布施の申請
09	造東寺司解案	勝宝3.2.8	作成	間写	布施の申請
10	造東寺司解案	勝宝3.2.8	作成	間写	布施の申請
11	造東寺司解案	勝宝3.2.7	作成	間写	布施の申請
12	写経布施校生勘出装演作物法例	勝宝3.2.8	作成	写経一般	布施法・校生勘出法・装演作物法
13	元興寺三綱返抄	勝宝3.2.16	作成	五月一日経	一切経目録受領の返抄
14	写書所請寿量品墨筆帳	勝宝3.2.23	作成	寿量品	筆墨の請求
15	写書所食口案	勝宝3.2	～勝宝3.3	五月一日経・間写	食料支給の記録
	-01 写書所食口案	勝宝3.2	作成	五月一日経・間写	食料支給の記録
	-02 写書所食口案	勝宝3.3	作成	五月一日経・間写	食料支給の記録
16	寿量品端切装演充帳	勝宝3.3.4	～勝宝3.11.3	寿量品	端切・装演の記録

写書所(→造東大寺司)	十一497～499	ZB37	1		往来軸「請金字華嚴經用度文」(右軸、表裏同文)。
写書所	十一496～497	ZZ6-3<1>	1		往来軸「請金字華嚴料紫紙并墨等充裝潢帳」(左軸)。
写書所(→?)	十一499～500	ZZ16-9<1>	1		
造東大寺司(→大安寺法宣大徳房)	三492～493	S45⑥(5)	1		
造東大寺司(→大安寺玄智大徳房)	十一500	ZZ16-2<8>	1		
写書所(造東大寺司→玄印大徳房)	十一502	ZZ16-6<9>裏	1	二次、[25]	付箋「廿七ノ四」、未修目録548「一枚」。
造東大寺司→元興寺曉仁大徳房→写書所	三493～494	S45⑥(6)	1		
写書所(造東大寺司→元興寺曉仁大徳房)	十一501	ZZ38-2<16>裏	1	二次、[30-08]	
写書所	十一503～504	ZZ16-6<9>	2	一次、[22]	
写書所(→造東大寺司)	十一505	ZZ37-5<6>裏	1	二次、経紙并軸緒納帳(勝宝4、十二335)	
写書所(→造東大寺司)	十二200～201	ZZ42-4<11>	1	裏書「廿二日自内裏来縹紙卅張 綺緒八丈五尺/正用六百廿四張 六百卅七 空破并冊八」	
写書所(→造東大寺司)	十一543	ZZ9-11<2>裏	1	二次、[31]	
写書所(→造東大寺司)	十一539～543	ZZ38-2<2～4>裏	1	二次、[30-02]	端裏「不用」。
写書所	各文書参照	各文書参照	—	各文書参照	
写書所(→造東大寺司)	十一506～507	ZZ38-2<1>	1	裏書「三嶋宗麻呂/吳原故/鴨書手」	端裏「天平勝宝三年告朔案」。付箋「十ノ五」、未修目録124「拾枚」。
写書所	各文書参照	各文書参照	—	各文書参照	
写書所(→造東大寺司)	十一507～509	ZZ38-2<2・3>	2	一次、[29]	
写書所(→造東大寺司)	十一509～510	ZZ38-2<3・4>	2	一次、[29]	
写書所(→造東大寺司)	十一511	ZZ38-2<5>	2	一次、考紙并錢進上経師等交名(勝宝2、二十五20～21)	
写書所(→造東大寺司)	十一512	ZZ38-2<6>	1		
写書所(→造東大寺司)	十一513～514	ZZ38-2<7>	1	裏書「校生一人 廿七日食口 合/書生六人 裝潢二人 校生二人/廿八日食口 書生六人 裝潢二人 校生一人」	
写書所(→造東大寺司)	十一514～515	ZZ38-2<8>	1		
写書所(→造東大寺司)	十一515～523	ZZ38-2<10～14>	1		付箋<11>「卅二ノ二」(「ノ二」の下に「九」を記すが、抹消)。未修目録831「一枚」。

17	写書所解案	勝宝3.3.11	作成	金字華嚴經	用度の記録
18	請金字華嚴料紫紙并墨等充装横帳	勝宝3.3.11	～勝宝3.3.22	金字華嚴經	料紙・墨の受納記録
19	写書所奉請文案	勝宝3.3.13	作成	間写	経本の貸出請求
20	造東寺司牒	勝宝3.3.25	作成	五月一日経	起信論疏の貸出請求
21	造東寺司牒案	勝宝3.3.25	作成	五月一日経	涅槃経疏の貸出請求
22	造東寺司牒案	勝宝3.3.25	作成	五月一日経	大毘婆娑論抄の貸出請求
23	造東寺司牒案	勝宝3.3.25	作成	五月一日経	対法論抄の貸出請求
24	造東寺司牒案	勝宝3.3.25	作成	五月一日経	対法論抄の貸出請求
25	経疏奉請検受帳	勝宝3.3.25	～勝宝3.3.29	五月一日経	論・疏等の借用記録
26	写書所解案	勝宝3.3.26	作成	五月一日経	奉写すべき巻数と必要な料紙の報告
27	写書所解案	(勝宝3.3頃)	作成	寿量品	寿量品の書写状況の報告
28	写書所解案	(勝宝3.4.5以前)	作成	五月一日経・間写	告朔(正月)
29	写書所解案	(勝宝3.4.5以前)	作成	五月一日経・間写	告朔(正月)
30	写書所告朔并食口案	勝宝3.4.5	～勝宝3.12.21	五月一日経・間写	月ごとの事業内容および食料支給の報告
-01	写書所解案	勝宝3.12.21	作成	五月一日経・間写	食料支給の報告
-02	写書所解案	(勝宝3.10頃)	～勝宝3.11.29	五月一日経・間写	食料支給の報告
-1	写書所解案	(勝宝3.10頃)	作成	五月一日経・間写	食料支給の報告
-2	写書所解案	勝宝3.11.29	作成	五月一日経・間写	食料支給の報告
-03	写書所解案	勝宝3.9.23	作成	五月一日経・間写	食料支給の報告
-04	写書所解案	(勝宝3.8頃)	作成	五月一日経・間写	食料支給の報告
-05	写書所食口案	(勝宝3.7頃)	作成	五月一日経・間写	食料支給の報告
-06	写書所解案	勝宝3.6.21	作成	五月一日経・間写	食料支給の報告
-07	写書所解案	勝宝3.6.1	作成	五月一日経・間写	告朔(5月)

写書所(→造東大寺司)	十一523～529	ZZ38-2(16～19)	2	一次、〈16〉〔24〕、〈17・18〉 造東大寺司牒案(勝宝2、 十一427～428)、〈19〉〔36〕	付箋(17)「(判読できず)」、 〈19〉「十五ノ一」、未修目 録224「帋巻 七枚」。
写書所(→造東大寺司)	十一529～533	ZZ38-2(20～23)	1		
写書所(→造東大寺司)	十一534～538	ZZ38-2(24～26)	1		
写書所(→造東大寺司)	三495～500	S6(7)	1		継目裏に「書」字あり。
写書所	十一545～548	ZZ9-11(1・2)	2	一次、〈2〉〔28〕	往来軸「品校帳三巻複」 (右軸)。
写書所(造東大寺司→?)	十一548	ZZ40-1(96)裏	1	二次、奉写一切経所食口 案(宝亀4年、二十一190～ 191)	
写書所	二十五28～29	ZZ14-5(13)	1		
写書所	二十五26～27	ZZ14-5(11)	1		
写書所	二十五27～28	ZZ14-5(12)	1	裏書「合大乘経律又小乘 経惣二千六百冊五巻/読 了一千一百十二巻/未読 一千五百冊三巻」	
写書所(→造東大寺司)	十一549～550	ZZ38-2(19)	1	二次、〔30-08〕	
写書所(→造東大寺司)	十一549	ZZ37-9(25)	1		前欠。付箋「十六」「卅一ノ 九」、未修目録793「一枚」。
写書所	十一550～552	ZZ6-4(4)	1		
写書所	十一552～555	ZZ6-4(1・2)	1		
写書所(→造東大寺司)	十一555～556	ZZ40-1(95)裏	1	二次、奉写一切経所食口 案(宝亀4年、二十一89～ 190)	
造東大寺司→紫微中台→ 造東大寺司	十一556～557	ZZ42-5(10)裏	1	二次、奉写一切経所告朔 案(宝亀4、二十一512～ 514)	
写書所(華嚴宗→?)	十一557～568	ZZ41-2(1～6)	1	端裏「嚴宗布施法文案 華嚴宗布施法案宗宗宗 宗/宗宗宗」	付箋(1・6)「卅九ノ十五」、 未修目録995「六枚」。
写書所(→?)	二十五34	ZZ28-13(7)裏	1	二次、〔75〕	
写書所(→?)	二十五34	ZZ28-13(6)裏	1	二次、〔75〕	
造東大寺司→写書所	十二1	ZZ16-2(6)	1		未修目録268「二枚」。
写書所→造東大寺司→宅 西堂→写書所	十二1～2	ZZ16-2(7)	1		未修目録268「二枚」。
写書所	十二2～5	ZZ15-1(1～3)	1		未修目録800「一枚」。
写書所(→新薬師寺三綱 務所)	十二7～8	ZZ16-3(15)	1		
写書所(造東大寺司→宣 教大徳坊)	三510～511	ZB6③	1		

	-08	写書所解案	勝宝3.5.1	作成	五月一日経・間写	告朔(4月)
	-09	写書所解案	勝宝3.4.5	作成	五月一日経・間写	告朔(3月)
	-10	写書所解案	勝宝3.4.5	作成	五月一日経・間写	告朔(2月)
	-11	写書所解案	勝宝3.4.5	作成	五月一日経・間写	告朔(正月)
31		寿量品校帳	勝宝3.4.10	～勝宝3.7.6	寿量品	校帳
32		造東大寺司啓案	勝宝3.4.21	作成	間写	六字呪王経書写の報告
33		読大小乗経律検定文案	(勝宝3.4.24)	作成	五月一日経	大小乗経律の検定記録
34		読大小乗経律検定文案	(勝宝3.4.24)	作成	五月一日経	大小乗経律の検定記録
35		読大小乗経律検定文案	(勝宝3.4.24頃)	作成	五月一日経	大小乗経律の検定記録
36		写書所解案	勝宝3.4.25	作成	五月一日経・間写	料紙の納充・残部の記録
37		六字呪王経料紙申送文案	勝宝3.4頃	作成	間写	使用料紙数の報告
38		充華嚴経本帳	勝宝3.5.15	～勝宝3.5.26	間写	担当卷数・用紙等の記録
39		充華嚴経紙墨帳	勝宝3.5.15	～勝宝3.6.3	間写	紙墨充当の記録
40		写書所解案	勝宝3.5.21	作成	五月一日経	料紙の請求
41		造東寺司奉請文	勝宝3.5.22	作成	—	雑阿含経の貸出
42		華嚴宗布施法定文案	勝宝3.5.25	作成	—	布施法定文案
43		写書所経疏本返送文	勝宝3.6.7	作成	間写	新華嚴経疏の返送
44		写書所疏本返送文	勝宝3.6.7	作成	間写	新華嚴経疏の返送
45		造東大寺司次官佐伯 今毛人宣	勝宝3.6.8	作成	—	薬師経進上の命令
46		写書所奉請文	勝宝3.6.8	作成	—	薬師経等の進上
47		経本出納帳	勝宝3.6.8	～勝宝3.7.27	写経一般	第4・5・6御櫃内の経本の出納帳
48		写書所進送文	勝宝3.6.12	作成	五月一日経	大小乗目録の進送
49		造東寺司牒案	勝宝3.6.14	作成	五月一日経	疏等の貸出請求

写書所(造東大寺司→大安寺法宣大德房)	三511	ZB6④	1		
僧宣教→写書所カ	十二8	ZZ12-9<4>	1		
写書所	十二12~16	ZZ12-9<8・9>	1		
写書所	十二17~21	ZZ12-9<1~3>	1		
写書所(→造東大寺司)	十二9~12	ZZ12-9<5~7>	1		未修目録877「三枚」。
写書所(→造東大寺司)	十二22~29	ZZ5-4<7~13>	1		<7>付箋「二ノ十三」「二」、未修目録28「五枚」。
写書所(→良弁)	三558	ZB9②	1	二次、奉写一切經所告朔案(宝亀4、未収)	
写書所(内侍司→市原王所)	三512	ZB7⑦	1	二次、奉写一切經所告朔案(宝亀4、二十一516~518)	
市原王→写書所	二十五37	ZZ42-5<12>裏	1	二次、奉写一切經所告朔案(宝亀4、二十一516)	
写書所	二十五38~39	ZZ14-5<8>	1		
写書所(造東大寺司→龍蓋寺司三綱所)	十二38~39	ZZ42-5<11>裏	1	二次、奉写一切經所告朔案(宝亀4、二十一512~516)	
龍蓋寺三綱→造東大寺司政所→写書所	三515	ZB9②	1	二次、奉写一切經所告朔案(宝亀4、未収)	
写書所(→?)	十二39~40	ZZ16-4<12>	1?	二次?、納櫃施綿等注文(年月日欠、十二40)	付箋「卅二ノ十四」、未修目録844「一枚」。
写書所	三515~521	ZB50	1	二次、[87]	
薬師寺三綱→造東大寺司政所→写書所	三521~522	ZB10①	1	二次、奉写一切經所布施文案(宝亀4、未収)	
東大寺俱舎衆→造東大寺司→写書所	三522~523	ZB7⑧	1	二次、奉写一切經所布施文案(宝亀4、二十二203~205)	
僧嚴智→造東大寺司→写書所	三524	Z45⑥	1	二次、奉写一切經所布施文案(宝亀4、二十二205~206)	
僧善福→写書所	十二40~41	ZZ3-3<5>裏	1	二次、奉写一切經所解案(宝亀4、二十二202)	
尼宝浄→造東大寺司→写書所	十二41	ZZ3-3<4>裏	1	二次、奉写一切經所解案(宝亀4、二十二200~201)	
東大寺→造東大寺司→写書所	十二42	ZZ3-3<3>裏	1	二次、奉写一切經所解案(宝亀4、二十二200)	
東大寺→造東大寺司政所→写書所	三526	S7①(2)	1	二次、奉写一切經所解案(宝亀4、二十一198~200)	
写書所(東大寺?→?)	十二42~60	ZZ13-8<1~11>	1	<7>裏書「称」	
写書所(→造東大寺司)	十二37~38	ZZ10-26<5>裏	1	二次、造東寺司解案(勝宝6、十三50~57)	前・後欠。
東大寺→造東大寺司政所→写書所	十二163~164	ZZ3-3<2>裏	1	二次、奉写一切經所解案(宝亀4、二十一196~197)	

50	造東寺司牒案	勝宝3.6.15	作成	五月一日経？	起信論疏の貸出請求
51	僧宣教状	勝宝3.6.15	作成	五月一日経	各疏の所在の通知
52	応写章疏等勘定目録	勝宝3.6	作成	五月一日経	章・疏等の目録
53	応請疏本目録	勝宝3.6	作成	五月一日経	疏本等の所在別目録
54	応請疏本目録	勝宝3.6.26	作成	五月一日経	疏本の目録
55	写書所解案	勝宝3.6	作成	千部法華経	布施の申請
56	写書所奉請文案	勝宝3.7.6	作成	—	弥勒経の貸出
57	内侍司牒案	勝宝3.7.15	作成	—	法華経・疏の貸出請求
58	市原王奉請文	(勝宝3.7.21カ)	作成	—	高僧伝の貸出請求
59	櫃納経巻検定文	(勝宝3.7カ)	作成	写経一般	各櫃内の状態を記録
60	造東寺司牒案	勝宝3.8.1	作成	五月一日経	雑阿含経等の返送
61	龍蓋寺牒	勝宝3.8.1	作成	—	經典の受領報告
62	借奉請経疏目録	勝宝3.8.3	作成	五月一日経	経・疏の目録
63	写書所解案	勝宝3.8.12	作成	寿量品	布施の申請
64	薬師寺三綱牒	勝宝3.8.13	作成	—	四分律疏の貸出請求
65	俱舎衆牒	勝宝3.8.14	作成	—	論疏の貸出請求
66	僧嚴智状	勝宝3.8.16	作成	—	經典の貸出請求
67	僧善福検納文	勝宝3.8.28	作成	—	經典の検納報告
68	法華寺尼宝浄啓	勝宝3.9.1	作成	—	華嚴経疏の貸出請求
69	東大寺牒	勝宝3.9.2	作成	—	維摩経疏の貸出請求
70	東大寺牒	勝宝3.9.18	作成	—	成実論・章疏の貸出請求
71	布施勘定帳	勝宝3.9.20	作成	—	布施の勘定帳
72	写書所布施文案	勝宝3.9以降	作成	間写	布施の申請
73	東大寺牒	勝宝3.10.8	作成	—	温室経等の貸出請求

左大臣家→造東大寺司→ 写書所	十二164～165	ZZ3-3<1>裏	1	二次、奉写一切経所告朔 案(宝亀4、二十二195～ 196)	
写書所	十二165～172	ZZ28-13<5～11>	2	一次、<6>〔44〕、<7>〔43〕	<5>付箋「冊ノ一」「二」、 <11>付箋「冊ノ一」二、未 修目録688「壹巻 八枚」。
写書所(春日虫麻呂→写 書所)	十二172～173	ZZ27-3<22>	1		付箋「十八」「冊二ノ十三」、 未修目録840「一枚」。
写書所(春日虫麻呂→写 書所)	十二173～174	ZZ27-3<23>	1		付箋「十九」「廿五帙四巻」、 未修目録508か。
写書所(→造東大寺司?)	十二172	不明	?	不明	
写書所(→造東大寺司)	二十五40～41	ZZ40-1<90>裏	1	二次、奉写一切経所食口 案(宝亀4年、二十一184～ 185)	
写書所(造東大寺司→?)	十二175～176	ZZ16-1<6・7>	1		<6>習書あり。
写書所(造東大寺司→?)	十二174～175	ZZ16-1<5>	1		未修目録387「一枚」。
左大臣家→造東大寺司政 所→写書所	三527	ZB5①	1	二次、奉写一切経所告朔 案(宝亀4、二十一511～ 512)	
東大寺律宗→造東大寺司 政所→写書所	十二177～178	ZZ3-10<16>裏	1	二次、奉写一切経所告朔 案(宝亀4、二十一508～ 510)	
東大寺俱舎衆→造東大寺 司政所→写書所	十二178～179	ZZ3-10<15>裏	1	二次、奉写一切経所告朔 案(宝亀4、二十一506～ 508)	
竹野廣成→写書所	十二180～182	ZZ23-4<55>	1		後欠。
写書所(→造東大寺司)	十二182	ZZ24-4<2>裏	2	一次、界線。三次、経師校 生裝潢上日帳(勝宝9～宝 字2、十三226～227)	前欠。
写書所(→造東大寺司)	三528～535	ZB50裏	2	一次、〔63〕	
写書所(→造東大寺司)	十二183～187	ZZ42-2<33～35>	1		未修目録953「三枚」。
写書所(→造東大寺司)	十二199～200	ZZ42-4<13>	1		未修目録1144「一枚」。
興福寺→東大寺三綱→写 書所	十二201～202	ZZ3-10<14>裏	1	二次、奉写一切経所告朔 案(宝亀4、二十一505～ 506)	

74	左大臣家牒	勝宝3. 10. 11	作成	—	南海伝の貸出請求
75	装演紙納充帳	勝宝3. 10. 14	～勝宝5. 10. 1	五月一日経・間写	料紙納充の記録
76	春日虫麻呂手実	勝宝3. 10. 22	作成	五月一日経・間写	造紙手実
77	春日虫麻呂手実	勝宝3. 10. 22	作成	五月一日経・間写	造紙手実
78	写書所奉請文案	勝宝3. 10. 22	作成	—	東大寺阿弥陀堂所蔵の金字最勝王経借用の報告
79	写書所解案	(勝宝3. 10以降)	作成	間写	緒軸の請求
80	造東大寺司論疏奉請文案	勝宝3. 11. 11	作成	五月一日経	論・疏等の貸出請求
81	造東大寺司論章疏奉請文案	勝宝3. 11. 11	作成	五月一日経	論・疏等の貸出請求
82	左大臣家牒	勝宝3. 11. 11	作成	—	南海伝の貸出請求
83	東大寺律宗牒	勝宝3. 11. 12	作成	—	経律論抄疏の貸出請求
84	東大寺俱舎衆牒	勝宝3. 11. 25	作成	—	論等の貸出請求
85	竹野廣成手実	勝宝3. 12. 7	作成	五月一日経・間写	写経・校正手実
86	写書所解案	勝宝3. 12. 10	作成	五月一日経？	布施の申請
87	写書所布施文案	勝宝3. 12. 12	作成	五月一日経・間写	布施支給の記録
88	写書所布施文案	勝宝3. 12. 15	作成	五月一日経・間写	布施支給の記録
89	寿量品料紙受領文	勝宝3. 12. 24	作成	寿量品	料紙の受納・返上記録
90	興福寺牒	勝宝3. 12. 27	作成	—	出家功德経の貸出請求